

奢侈と消費

— マンデヴィルとムロンを中心に —

米 田 昇 平

序

マンデヴィル (Bernard Mandeville, 1670-1733) の『蜂の寓話』 (*The Fable of the Bees*, 1714) が巻き起こしたセンセーションは、ただちにフランスに飛び火し、奢侈的欲求、奢侈的消費の是非をめぐる人々に態度表明を迫ることになった。奢侈論争の開始である。マンデヴィルは利己的情念に自己抑制を強いるのは反自然的であり、それゆえ不可能であるとして、これに導かれる奢侈的欲求、奢侈的消費を容認するばかりか、さらには社会の繁栄、文明の果実はこの利己的情念の導きによりもたらされると考えた。ここには奢侈的欲求を道德世界のくびきから解き放ちうる注目すべき飛躍がある。欲求充足を求める利己的情念は道德的な自己抑制の対象から解放されうる根拠を手に入れたのである。経済と道德が分離し、経済そのものがいわば一つの規範的価値を獲得するにいったともいえる。

このような認識を可能にしたのは、いうまでもなく奢侈の経済的機能への着目である。奢侈は一方でそれを求める人々の労働意欲を駆り立て、他方でそれはすなわち消費需要として生産を刺激する。こうして、かぎりない奢侈的欲求に導かれて生産物の量と種類が拡大し、より高い水準の消費欲求の充足が実現されていく。この傾向は反面でいやおうなく人々の協働の関係を深め、社会的結合を強めていく。したがって、文明化の本質は分業と交換の相互依存のシステムの展開を導きつつ、より高い水準の消費欲

求が相互に充足されあうところにある。文明社会はいわば欲求の体系として構築されていくのである。

マンデヴィルは奢侈をリゴリスティックに定義することで、文明の果実を悪徳の所産であるときめつけ（「私悪は公益」）、果実を貪りながら徳を称揚することの偽瞞をあばきたてた。激しい論争は最初から不可避であったといわなければならない。しかし、うえのような認識それ自体はかならずしもマンデヴィルの独創ではない。多くのマンデヴィル研究が指摘するように、彼の有力な想源の一つは人間本性の利己的情念を直視するフランスの知的伝統であり、彼の立つ地平は17世紀後半のジャンセニストやモラリストやリベルタンたち、すなわちピエール・ニコル、ラ・ロシュフーコー、ラ・フォンテーヌ、ピエール・ペールなどがおもに準備したものであった⁽¹⁾。フランスにおいて、この同じ知的伝統のなかからこれを越え出る思想的飛躍を遂げたのがボワギルベール（Pierre le Pesant de Boisguilbert, 1646-1714）である。彼はマンデヴィルよりもはやく、しかもより明確に文明社会を分業と交換の相互依存のシステムに基づく欲求の体系として描いている⁽²⁾。『蜂の寓話』およびそこに含まれる諸論点はムロン（Jean François Melon, 1675-1738）やヴォルテールによってフランスに紹介され移植されるが、「奢侈」を係争点とする論じ方を別にすれば、思想の核心部分はずでになじみ深いものであったのである。というよりも、かれらはだれもが、人間本性における自己愛、利己的情念の優位という否定しがたい現実を前提に「情念と秩序の哲学」を構築しようとする、新たな知的伝統の共通の地盤に立っているといえる。奢侈という係争点は、いわばこの大きなテーマを象徴するにすぎない。

経済学の形成が、こうした傾向に密接に呼応していることはいうまでもない。道徳世界からの消費欲求の解放は、富の理論、生産力の理論として経済学が形成される不可欠の前提であるし、また消費は富の理論の重要な一要素をなすからである。本稿の目的は、18世紀を通じて継続するこの大きな転換の初期の一コマを、マンデヴィル、ムロンなどの議論にかいま

みようとするものである。

(注) (1) たとえば, Thomas A. Horne, *The Social Thought of Bernard Mandeville*, 1978 の第 2 章「マンデヴィルとフランスの道徳的伝統」, あるいは Simone Meyssonier, *La Balance et l'Horloge, la genèse de la pensée libérale en France au XVIII^e siècle*, 1989 の第 4 章「奢侈論争」をみよ。

(2) ボワギルベールの有力な想源の一つはニコルやジャン・ドマなどのジャンセニズムであったことは, いまや周知となっている。ファッカレロは, ニコルやドマは利己的情念の効用を称揚しながら結局, 秩序の維持のためには開明的な自己愛と強制的な政治的秩序とを必要としたが, ボワギルベールは秩序の自律性の認識によって, ジャンセニズムの伝統を一举に乗り越えたとし, ここに自由主義経済学の誕生をみいだした (Gilbert Faccarello, *Aux origines de l'économie politique libérale: Pierre de Boisguilbert*, Paris, 1986, p. 228.)。彼はさらに次のように述べている。「ニコルの思想およびそれによって代表されるジャンセニズムの伝統は, マンデヴィルの著作を通じてアングロ・サクソンにおける思想的展開に影響を与えた。……一般によくとりあげられるマンデヴィルは, 大部分の論点でかなり後退しており, 『蜂の寓話』の出版が引き起こしたスキャンダルには, 著者の名前に向けられた言葉の戯れ (Man-devil) と同じく, 根拠がないように思える」(ibid., pp. 157-8)。マンデヴィルが「かなり後退」しているかどうかは, 彼のいう「政治(家)」の機能をどのように評価するかにかかっている。なお以下の拙論をも参照されたい。米田昇平「ボワギルベールの消費論」『下関市立大学論集』, 第 35 巻, 第 2・3 合併号 (1992 年 1 月)。

1. マンデヴィル

マンデヴィルはいう。「(未開状態から社会状態への移行により) 人間の自負に力をふるう余地ができ, 羨望や強欲や野心が心をとらえはじめるとすぐに, 人間は生来の無垢や愚鈍から呼び起こされる。知識が増すにともない欲望が大きくなり, したがって欲求や渴望が多様化する」⁽¹⁾ (I, p. 206/188)。しかも「満足は, みずからの境遇を改善しようと熱心になっ

ているかぎり人間には無縁のものである」(I, p. 242/221)。こうして欲求はかぎりなく拡大し多様化するが、これとともに欲求充足のうえでの困難も増大する。このため人々は協働を余儀なくされ、社会の形成が必然化される(I, p. 344/316)。協働とは要するに「労働を分割し再分割すること」(II, p. 284/300)である。マンデヴィルは分業が生産力を大きく高めることを十分に認識しつつ、欲求の拡大と多様化に牽引され、これと一体のものとして分業に基づく生産体系が展開していくと考えた。欲求の原因は欠乏あるいは窮乏にあるが、「まさにそうした窮乏からのみ、あらゆる職業や雇用が生じる」(I, p. 404/373)のである。また一方で、「人間は欲望によって駆り立てられるとき以外、けっして努力しない」(I, p. 184/168)から、この無限の欲求に駆り立てられてこそ、人々は勤労に励み、欲求充足の困難を克服していくのである。まさに「勤労は利得への渴望と境遇を改善しようという根気強い欲望とを含意して」(I, p. 244/223)いる。彼はいう。「社会の各成員がお互いに与えあう相互の用役はすべて、まさにそのような欠乏の多様さに依存していること、したがって欠乏が多様であるほど、ますます多くの個人が他人のための骨折りに個人的な利益をみだし、こうしてともに結びあって一つの集団を構成するであろう」(I, p. 403/371)。欲求あるいは欠乏は人々の相互依存あるいは社会的結合の原因であり、多様な職業からなる高度な生産体系を導くとともに、人々の勤労を刺激してこれを支える。マンデヴィルにとって、社会はまさに欲求の体系として構築されるのである⁽²⁾。

欲求の拡大と多様化を導く動因は自負、羨望、強欲、野心などの悪徳である。みずからを他者から差別化しようとする自負心や虚栄心が、必要以上のものを人々に求めさせ、文明社会という欲求の体系を築いていく原動力であった。このような悪徳に駆り立てられてすすむ消費欲求の充足は人間本性の腐敗、墮落を示すものであり、文明化の過程は人間本性の墮落の過程でもあった。したがって、文明の果実を享受しながら悪徳を非難し美德や無垢を求めるのは自己矛盾である(I, p. 6/5)。

マンデヴィルによれば、このような必要以上のものへの欲求は基本的にすべて奢侈の欲求であり、その消費は奢侈の消費である。したがって文明化の過程を導いているのは奢侈である。こうした奢侈の規定はきわめて曖昧であるが、その理由は「必要」の観念の曖昧さにある。もっとも厳密に生存に直接必要ではないものをすべて奢侈だと解すれば、ほとんどすべての欲求や消費は奢侈的であり（I, p. 107/101）、文明社会を完全に否定するのでないかぎり奢侈批判はその根拠を失うであろう。一般的に言えば、「必要」の観念は時代と社会階層に応じて相対的である。すなわち「かつては奢侈が生み出すとみなされた多くの事物が、いまでは一般の慈善の対象になるほどひどく貧しい人々にすら与えられている」（I, p. 169/155）、あるいは「ある階層の人々には余分だといわれるものも、もっと身分の高い人々には必要だと考えられる」（I, p. 108/102）。したがって、次のような次第となる。「…それはどれほどの骨折りを要したか、またどれほど原始的な質朴さからはなれたかに応じて、どれほど奢侈の名に値するかがきまる。われわれの感嘆はせいぜい新しいものにおよぶだけで、慣れ親しんでいるものがいかに精巧であろうとも、その卓越性はだれも見過してしまうのである」（I, p. 169/155）。消費水準が一般に向上するとともに、各社会階層において過剰であったものが必要に変わり、こうして各階層のそれぞれが階段を一段ずつのぼるように消費水準を高めていく、しかしそれにしても「必要」の社会階層による序列は厳然と存在するから、相対的ながら、新たな「必要」に対して新たな「過剰」がつねに生じうる、という次第である。

したがって、ここには二つの奢侈の観念が含まれている。一つは「原始的な質朴さ」からますます遠ざかりつつも次第に奢侈が奢侈としては陳腐化し、したがって奢侈といいながら、一般的かつ個別的な消費水準の向上を意味するにすぎない場合と、新たな必要の水準に対する相対的な過剰としての奢侈である^③。

いずれにせよ、すでに実現された消費水準はやがて陳腐化し、人々はよ

り高い水準の奢侈的欲求の充足を求める。分業と交換の相互依存のシステムは、このような常により高い水準を求める奢侈的欲求によって駆動され維持されるのであった。ではこの欲求はどのように需要に転化し、それがどのようにして分業に基づく生産体系を構築していくのだろうか。この点について彼は十分に述べてはいない⁽⁴⁾。彼が強調するのは、現実の高度に洗練された文明社会を支える生産と流通のシステムは、もっぱら必要を越える奢侈的欲求や消費に支えられている、という事実である。「すばらしい緋色あるいは真紅色の毛織物をつくるまでには、なんとという大騒ぎが世界のいくつかの地方でなされることだろう。なんとさまざまな職業や職人が利用されなければならないことか。梳毛工，紡績工，織布工，羅紗工，洗擦工，染色工，張布工，練条工，荷造り人のような明らかな者たちばかりでなく、ほかに水車大工，白織工，葉種屋のように、毛織物とはかけはなれていて、縁がなさそうにみえる者たちがいる」(I, p. 356/328)。

この相互依存のシステムは貨幣の循環（流通）により維持される。たとえば、追いはぎが一人の女性に与えた10ポンドは、婦人服裁断師，お針子，リンネル商人と渡っていき，大勢の小売商人が一月もしないうちに女の金の一部に触れることになるろう (I, p. 88/83)。したがって人々が奢侈的消費を控え儉約すれば，この循環（流通）はたちまち損なわれ，この相互依存のシステムは立ち行かなくなる。儉約はすなわち貨幣の退蔵を意味し，貨幣の退蔵は消費力の減退を意味するからである。自負や奢侈が国内から追い払われれば，「ランプ札やさいころの製作者だけでなく……呉服屋や家具商や仕立て屋やそのほか多くの者も」半年で餓死するであろう (I, p. 85/80)，と彼はいう。「儉約は温和な人間が住む小さな社会でのみふさわしい。……どうにかしてだれもが仕事にありつかねばならない大勢の人々がいる商業国では，まったく無用」(I, pp. 104-5/98-99) である。自負，虚栄，乱費，放蕩などの悪徳に由来する消費需要が，この経済社会を根底から支えているのである⁽⁵⁾。乱費や放蕩にかかわる奢侈的消費の際立った例が多くあげられているが，要するにマンデヴィルは，一般

に消費需要の減退は分業＝交換の相互依存のシステムを損なうことを述べているのである。欲求に応ずるために生まれた「あらゆる職業や雇用」は、過少消費により打撃をこうむり失業が発生するであろう。

ではこの奢侈的な消費需要の担い手はだれか。教区でいちばん貧しい人夫の妻は、役に立たない中古のガウンとスカートを買い求め自分と夫をなかば飢えさせる、織布工、靴屋、仕立屋、床屋などの卑しい働き手は、無分別にも資産家の商人のような身なりをしようとする、このように各階層の人々は次々に分不相応なものを求め、いちばん身分の高い人々は、すばらしい家具や贅沢な庭園や豪壮な邸宅に莫大な財産を注ぎこまなければならない（I, p. 129/118-119）。各階層の人々はそれぞれ相対的なレベルで過剰な消費（乱費）を行いうるのであった。彼は常識の偽瞞をあばこうとして際立った奢侈の例を多くあげ、風刺の効果を高めようとするあまり、むしろ露悪趣味に陥ってさえる。しかしここまでの彼の議論が、実質的に一般的な消費力を念頭に置いており、しばしばいわれるように、富者の消費に限定されるものではないことは明らかである。彼はいう。「国民の大多数を贅沢にするには、国の生産高が人口に比してかなり多く、贅沢するものが安くなければならない」（I, p. 183/167）。人々はだれでも相対的レベルで必要を越える奢侈を求めこれを享受しうるのである。そしてこのかぎりでは、この観点はいま一つの奢侈の経済的機能と結合する。すなわち労働のインセンティブの機能である。人々が自負心に駆り立てられ「境遇を改善しよう」と分不相応なものを求めて勤労に励むことにより、奢侈的な消費需要に応ずべく展開する分業と交換の相互依存のシステムが維持される。消費需要の機能と労働のインセンティブの機能は、一体となって文明化の過程を駆動するのである。このようなビジョンがマンデヴィルの脳裏に宿ったことは確かだと思われる。彼は『続・蜂の寓話』で、この境遇の改善への欲求は、例外なく人間のもっとも顕著な特徴であると明言しているのであるから（II, p. 181/192-3）。まさに、だれもがもつ境遇の改善への意欲に導かれつつ「国民の大多数の贅沢」を実現すると

ころに文明社会の本質があった。

しかしながら、このようなビジョンはみずからを貫徹しえない。彼が「絶対に破ってはならない原則」と考えた強固な固定観念が、一方で、文明社会を構成する人々を「国家の豊穡や奢侈」を享受する富者（消費者）とそれらを生み出す貧者（生産者）とに分裂させてしまうからである。

原則とはなにか。「貧民は厳しく仕事にしばりつけておくこと、かれらの困窮を救ってやるのは賢明だが、それを除くのは愚かであること、食料したがって労働を安くするために農業と漁業のあらゆる分野が促進されるべきこと」（I, p. 248/227）である。また彼はこうもいう。「……日々の労働で生計を立てている者は、自負心と強欲のいずれからも強い影響を受けることはめったにない。そこで、困窮のほかにかれらを役立つように奮起させるものはなく……」（I, p. 194/178）、労働者は容易に怠惰と快楽に傾き、一週間のうち四日の労働で食べていけるなら五日働くように説得することはほとんどできない、かれらは「直接の必要性」に迫られたときにしか仕事をしない（I, p. 192/176）。こうして、労働者の怠惰による自発的失業の可能性を論拠とする、伝統的な低賃金論が展開される。これは「国民の大多数の贅沢」を求める方向と明らかに矛盾する。境遇の改善への努力は例外なく人間の顕著な特徴であり、この勤労に導かれて人間は「思考と考案の卓越性」（I, p. 367/338）を発揮し、文明の果実をもたらすとするビジョンにも抵触する。彼は次のように明言する。「奢侈が王国の各方面にわたって一般的なものにされるべきであるなど、わたしには想像もできなかった。……最高の奢侈がみられるのはきわめて人口の多い国だけ、しかもその上層部だけであって、より大きな割合を占めている多数の者は、すべてを支える基礎である最下層の者たち、つまり大勢の労働貧民でなければならない」（I, p. 249/227-8）。こうして、社会は一部の富者と大多数の労働貧民とに分裂せざるをえない。ただし彼は労働貧民のすべてが永遠にその境遇に閉じ込められべきであるとは考えない。富者が没落し貧者が富むという社会的上昇と下降の可能性を指摘する。しかしこ

の場合でも両者の一定の割合は維持されねばならず、「およそ国家をなす複合体において、全体が均衡を保って混合するように、異なる階級の人々は人数の点でお互いに一定の調和を保つべき」(Ⅱ, p. 353/373)であった。

またすでに述べたように、彼は、高度に洗練された文明社会を支える生産＝流通のシステムはもっぱら必要を越える奢侈的な消費需要に支えられている、という事実を強調するばかりで、大衆的消費の対象である穀物などの必要品の生産がどのように維持されるか、という点への着目はほとんどみられない。そのためか、基本的に必需品のみを消費する労働貧民の消費者としての側面が注目されることはなかった。労働貧民は生産者であるにすぎない。こうして、かれら労働貧民は無知と困窮ゆえにのみ労働に励むとする固定観念を前提にするかぎり、「国民の大多数の贅沢」あるいは一般的かつ個別的な消費水準の向上を容認し、これを積極的にめざしうる論理の展開は完全に封じられてしまう。ここには、各階層の人々がそれぞれより高いレベルの消費欲求の充足を求めて勤労に励むという、まえにみた文明化のビジョンが入り込む余地はない。国民の「大多数の……労働貧民」が貧困を抜け出すことは、けっして許されないからである。このとき多くの労働貧民に仕事を与えるのは、「国家の豊穰や奢侈」をもっぱら享受する富者の奢侈的消費にかぎられることになる。こうして、彼の文明社会観の前には伝統的な労働観が隘路として横たわり、そのビジョンが欲求の体系として自己貫徹を遂げることを妨げていたのである。

マンデヴィルと同じくボワギルベールにとっても、文明化の原動力は人々の「豊かさへの願望」すなわちより高い水準の欲求充足への希求である。この過程は同じく人間の墮落の深まりを意味するが、しかしこの「精神の墮落と洗練」に導かれてさまざまな職業が生まれ、人々のかぎらない消費欲求が次々に満たされていく。こうして文明化の進展とともに分業・交換関係が拡大していく。ここでの交換は欲求と欲求のあるいは効用と効用の交換にほかならず、「世界の調和をもたらす国家を維持しうるの

は、このような相互的効用」なのであった。まさに欲求の体系である。しかもこの体系は農業生産力により支えられている、というよりも、文明化の進展は農業生産力の拡大による農産物余剰の増大が前提条件であった。これによってはじめて人々の多様な消費欲求に応えるための多様な職業が生まれうる。これらの職業は「富裕の連鎖」（相互依存関係）をなし、生産と消費の一体的システムを構成して相互に支えあっている。最初は必需品だけであったのが、便益品、洗練品、華美品……と次第に奢侈性の高い財が生み出されていく。このような展開は不労所得を手にする有閑階級の奢侈的欲求に先導されてすすむから、生産者大衆の雇用はかれらの奢侈的消費に依存する。しかしながら、彼の認識では、有閑階級の奢侈的消費を維持するための所得（土地所得）は生産者大衆の勤労所得に規定されている。「余分品の労働者は彼に生活費を提供してくれた人のおかげで必需品を買い、それによって農業者の生産物の価格を支える。こうして価格が維持されてはじめて農業者は自分の主人に支払うことができ、主人はこの労働者から買うことができるようになるのである」⁽⁶⁾。農産物の価格が一定水準以上に維持されてはじめて土地所得は確実に実現されるが、この農産物の価格は生産者大衆の勤労所得すなわちかれらの消費力に支えられているのである。こうして、生産者大衆の消費者としての側面への着目は彼には必然的であった。有閑階級は消費と生産の「仲介役」にすぎず、農産物の低価格をまねき土地所得の確実な実現を妨げることで経済を縮小再生産に陥れるところの過少消費とは、大衆的消費の過少にほかならなかった。ただ、大衆的消費への彼の着目は高賃金の要請へとはいたらなかったことを、つけ加えておかねばならない。彼もまたマンデヴィルと同じく、実質賃金の上昇は労働者の労働意欲を減退させるとして、「必要に迫られないと働かない」かれらには低賃金こそ望ましいと考えた⁽⁷⁾。だれもが抱くはずの「豊かさへの願望」は、ときとしてかれらには無縁のものであったのである。彼もまたこの点では、この時代の固定観念を抜け出てはいなかったといわざるをえない。

(注) (1) マンデヴィルのテキストは、*The Fable of the Bees : or, Private Vices, Publick Benefits*, by Bernard Mandeville, with a Commentary Critical, Historical, and Explanatory by F.B.Kaye, 2vols, 1924 および泉谷治訳『蜂の寓話 私悪すなわち公益』（法政大学出版局、1985年）と同じく泉谷訳『続・蜂の寓話』（法政大学出版局、1993年）を用いた。引用ページの前はケイ版、後は邦訳のものである。ただし訳文はかならずしも邦訳と同じではない。

(2) 「市民社会がまったくわれわれの欲求の多様性のうえに築かれているように、その上部構造全体は、人間がお互いに与えあう相互的な用役から成り立っている」（Ⅱ, p. 349/369）。

(3) 相対的にせよ、こうしてマンデヴィルは必要に対する過剰な欲求や消費をすべて奢侈とみなした。これに対し、フォルボネは必要と過剰のあいだに「便宜」の一領域をもうける。「こうして、自己保存をより確実にするさまざまな便宜は、物理的な必要と奢侈とのあいだに自然がもうけた一段階だと私には思われる」（Forbonnais, *Elémens de Commerce*, 2vols, Paris, 1754, Ⅱ, p. 135）。これにより消費水準の一般的向上の成果を便宜の領域に含め、過剰な欲求や消費としての奢侈から区別することができる。ただし、便宜と奢侈の境界は曖昧かつ相対的であり、とくに文明化の進展につれて便宜の領域が広がることもうえと同じ事情が生じるであろう。

(4) 彼は「社会の自負や虚栄が増大し、社会のあらゆる欲望が拡大すればするほど、きわめて人口稠密な大社会に成長することがますます可能になるに違いない」（Ⅰ, pp. 346-7/318）と述べる。それがどのようにして可能かについては、分業論が示唆を与えるのみで十分な論理展開はみられない。

(5) 私悪を公益へと導き経済社会の秩序を維持するのは、「政治家の巧妙な管理」（Ⅰ, p. 369/340）である。田中敏弘氏はマンデヴィル解釈の重要な争点の一つであるこの「政治家の管理」とは、積極的な干渉主義を表わすものではなく「個人の利己心を自由に発揮するための基本的な社会・政治諸制度の樹立」のことであり、「このように整備された市民社会はそれ独自の分業・交換のメカニズムにより自動的に機能する」として、マンデヴィルの「自由放任論への傾斜」を指摘している（田中『マンデヴィルの社会・経済思想』、1966年、有斐閣、76ページ）。このように、経済世界の利己的情念を動因とする「分業・交換のメカニズム」への着目は、道徳的自律の論理を前提とせずに「商業社会」における秩序の自律性の認識へと導く。ボワギルベールも同じであり、か

これらの「飛躍」のもう一つの重要な意味もここにある。この点で、ファッカレロがいうほどマンデヴィルは「後退」していない。ただマンデヴィルには、この「交換・分業のメカニズム」の具体的な説明がきわめて乏しい。

(6) I.N.E.D., *Pierre de Boisguilbert ou la naissance de l'économie politique*, 2vols, Paris, 1966, II, p. 988. 詳しくは前掲の拙稿をみよ。

(7) ボワギルベールにとって、大衆的消費の過少の原因はかれらの消費力に打撃を与えている恣意的な税制であって、低賃金ではない。

2. ムロン

ムロンはボワギルベールと同じく、交換と分業の相互依存のシステムを貨幣循環あるいは消費連鎖として把握する。「(各人のもつ土地、家屋、ラント、公債などの) どれかが価値を失えば、それは無用の余分となり、その所有者は彼に必要なもの、すなわち彼の隣人の物産をもはや買えなくなる、これにより隣人にとってもこの物産は同じく余分であり無用のものとなり、彼のもたない衣服を手に入れることができなくなる、こうして職人は彼にパンやぶどう酒をもたらしたはずの勤労をもはや売らない、そして物産の安値は農業者を落胆させ、税の支払をできなくしてしまう。これにより社会にも個人にも新たな無価値が生まれる。……社会の構成部分には、ある部分に打撃を加えれば、その影響が他の部分に波及しないはずまなほ密接な結び付きがある」(pp. 7-8)⁽¹⁾⁽²⁾。そしてボワギルベールと同じく、またマンデヴィルの認識とは異なって、経済的相互依存の基礎は農業である⁽³⁾。「小麦は商業の基礎」(p. 4)であり一次的必需品である。労働者たちはこの一次的必需品が十分にあるときだけ、ぶどう酒、塩、木綿のような二次的必需品の生産に用いられ、二次的必需品が十分にあるときだけ、絹、砂糖、タバコなどの奢侈的必需品の生産に用いられる(pp. 5-6, 121)。

しかし国民の富の水準は、小麦の「基本的富」だけでなく、二次的必要

品、奢侈品を含め、これらの財貨を国民がどれほど消費し享受しうるかに規定される。「…消費され国内商業の対象となるもの…が、人々の現実の厚生を構成する…」(p. 341) からである。ムロンはこうもいう。「社会はもっとも多くの人々にもっとも大きな便宜 (commodités) を与えているかどうかに応じてのみ、野蛮な習俗から遠ざかるのである」(p. 25)。こうして、国民の厚生は豊かな消費財の享受にあり、文明化の過程はそれによる生活の便宜の増大であることが明確に把握されている。この過程を導いているのも人々の消費欲求である。彼はいう。「残念ながら人を導いているのは情念である。そして立法者がなすべきことは、ただその情念を社会の利益になるように仕向けることである。軍人が勇敢なのはもっぱら野心のためであり、商人が働くのはもっぱら金銭欲のゆえである。どちらもたいてい享乐的に人生を享受することができるようにそうするのである。こうして、奢侈はかれらには労働の新たな動機となるのである」(p. 106)。そしてこの享楽への願望は次々に新たな欲求を生じさせ、技術の進歩と産業活動の拡張をもたらす。「技術の進歩に応じて…(生じる) このような産業活動にはかぎりがない。それは常に増大し、そして常に新たな欲求が生じて新たな産業活動がこれにこたえていくだろうと思われる」(p. 89)。まさに、かぎりない消費欲求あるいは享楽への願望により、一方で人々は勤労意欲を駆り立てられ、他方でその欲求や願望を満たすべく技術の進歩と産業活動のかぎりない拡張が導かれていく。これは進歩の観念のこのうえなく明快な表明であろう。ムロンは技術とインダストリーへのこのような着目において独自の光彩を放っている。こうしてここに、とりあえず、消費欲求とインダストリーを車の両輪として文明化が導かれていくという、しばらくのちのヒュームと同じ展望をみることができる。

彼は奢侈を「富と統治の安全がもたらす並外れた豪奢である」(p. 106) と規定する。しかしこの「並外れた豪奢」は、マンデヴィルの場合と同様に相対的である。彼はいう。「この洗練は常に時代と人とともに相対的である」、われわれの父親には奢侈であったものが今ではありふれたもので

ある、われわれにとっての奢侈は甥たちにはそうではないであろう、農民は村の資産家に奢侈をみだし、その資産家は隣の町の住民に奢侈をみる、町の住民は首都の住民に比べて自分のことを粗末だと思い、首都の住民は宮廷人の前では自分を粗末だと思う (pp. 107-8)。また土地をわずかしか持たずほとんど手の労働で生計を立てざるをえない国では、すべてが奢侈である、それは自由な人間の社会というよりも隠遁者の社会に似ている (pp. 111-2)。

こうして、奢侈は「よく文明化されたあらゆる社会の必然的結果である」(p. 106)。したがって奢侈を否定することは文明を否定することであった。ただしムロンはマンデヴィルと違って、奢侈の道徳的な当否は問わない。巧みに道徳と政治の世界を分離する。「奢侈を一掃するのは宗教の仕事であるが、国家の仕事は奢侈を国家の利益に変えることである」(p. 124)。道徳的判断は彼の関心の埒外であり、文明の果実およびそれを生む人間の利己的情念が悪徳であるかどうかは問題ではない。社会の利益を増進するかどうかだけが問題である。「愚かな虚栄心が隣人の身なりを妬む個人を破滅させることが、国家に問題だろうか」(p. 121)、あるいは「立法者はだれも特別扱いしないでいつも最大多数の幸福を目指している」(p. 123)。ここに彼の功利主義の立場が鮮明に現われている。「生活の便宜」の増大、あるいはマンデヴィルのいう「大多数の贅沢」こそ立法者の目指すべき目標であった。こうして彼は次のように述べる。「奢侈という言葉は空虚な呼び名であり、治政や商業のあらゆる運用から排除すべきである。なぜなら、それは曖昧で間違っていて混乱した観念しかもたらさず、その濫用は産業活動そのものを根本から停止させてしまう可能性があるからである」(p. 113)。

彼は奢侈といいながら事実上、それによって「便宜」あるいは「洗練」を、すなわち一般的な消費水準の向上を指示していることは明らかである。ムロンは道徳的判断を留保するが、しかし、このような便宜や洗練を享受することが魂の墮落、徳性の腐敗に通じるなどとは、彼には思えな

かったにちがいない。それらの享受を妨げられた社会は、「自由な人間の社会というよりも隠遁者の社会に似ている」と考えたのだから。こうして、ムロンは力強く文明の果実を称揚し、かぎりない進歩の可能性を表明しえたのである。

さらにムロンは、マンデヴィルの抱いた固定観念からも自由である。労働者の怠惰による自発的失業の可能性を論拠とする低賃金論を、ムロンは受け入れない。彼はいう。「われわれから程遠く、わが国の統治の穏やかさから程遠い恐るべき格律がある。それは人民は貧しければ貧しいほどより従順である、というものである。そのようなことをいわせたものは心の冷酷さであって、政治ではない。そしてそれは国王に対して揺るぎない忠誠心と愛情を抱くフランス人民のことではなく、ほかの国の人民のことをいったものだ。だが、どんな政府であれ恐れるべきものがあるとすれば、それは貧困によって絶望に駆り立てられ、もはや失うものを何ももたない人民の存在である。金持ちは大衆の貧困を利用して、わずかな賃金で賃金労働者を働かせる。ある幸運な成り行きによって豊富が回復し、まえより大勢の市民が労働者に仕事を与え農業者から物産を買うのに必要なものを手にいれるとして、このとき以前と同じ価格で働いたり売ったりすることへの拒否を、この金持ちは傲慢あるいは反抗などと呼べるだろうか。…かれらの至極当然の、結構な食事をねたむことなどできようか」(pp. 290-1)。ムロンはおそらくマンデヴィルを念頭に置いて、その労働者観あるいは低賃金論をこのように批判する。彼はマンデヴィルの前にたちふさがっていた隘路をまぬがれ、ヒュームやフォルボネがやがて立つ地平にいち早く到達しえたのだろうか。

しかしながら、この行文にも窺われるように、批判、反発は情緒的レベルにとどまっているといわざるをえない。ムロンは労働者大衆の賃金の上昇あるいは消費水準の向上を明確に容認するが、その理由としては人道主義の観点が際立っているのみで⁽⁴⁾、低賃金論批判から積極的に高賃金の経済学の展開へといたるわけではない。このような認識が生産者大衆の消費

需要の着目へと深まっていけないのである。この意味で、経済学のレベルでみれば彼の低賃金論批判は成就しえていない。そもそも、労働のインセンティブの観念もかならずしも一般的なものではなかったように思える。「享乐的に人生を享受する」ために勤労に励む人々として彼が例にあげるのは、軍人、貿易商人、船主である。彼は「奢侈はいわば無為と怠惰の破壊者である」とし、続けてこういう。「贅沢な人間は自分の富を保持し新たに獲得するために働かなければ、すぐに富がなくなってしまうことを知るであろう。そして彼は人々の羨望の視線にさらされるほど、社会の義務を果たそうとより一生懸命になる」(pp. 109-10)。このように、奢侈的欲求により勤労意欲を駆り立てられるのは、羨望の視線にさらされる贅沢な人間すなわち富者にかぎられている、あるいは少なくともその主体を一般化する叙述を彼は残していない。奢侈的消費すなわち文明の果実の享受それ自体はあらゆる人々に開かれていることは、すでにみた奢侈の相対性の議論からも明らかであるが、その享受がみずからの意欲の結果である点は十分に明らかにされていないのである。

こうしてまた、奢侈の消費需要の機能も明示的には富者のそれにかぎられる。彼は次のようにいう「(贅沢な人のばかげた支出による)この貨幣は、彼の金庫に留められれば社会にとっては死んでしまうだろう。庭師がそれを受け取る、庭師は新たに頼まれた仕事を通じてそれを手に入れたのである。裸も同然であった彼の子供たちはそれで身繕いをする、かれらは豊富にパンを食し、よりよい衣服をまとい、明るい希望を胸に労働に励む」(pp. 123-4)。ムロンは分業と交換の相互依存のシステムを消費連鎖として認識し、しかも農業生産をそのシステムの基礎に置いていた。しかしながら生産者大衆の消費力に十分に着目するにはいたらなかった。穀物価格の下落を恐れながら、労働者の消費者としての側面への関心は示されなかった。こうして、一方で勤労意欲を駆り立て、他方で消費需要に転化して技術の進歩と産業活動のかぎりない拡張をもたらすべき消費欲求の主体は、明示的には富者にかぎられていたのである。

そもそもムロンの主要な関心は消費需要にはなかったと思われる。貨幣循環あるいは消費連鎖の視点を持ちながらも、彼のおもな関心は、貨幣の退蔵による消費力の減退つまり過少消費の可能性をはらむ消費需要水準の問題よりも、むしろ生産物の交換手段としての貨幣の必要流通量の問題に向けられていた。交換のシステムの順調な維持のためには、交換される生産物価値の総額に見合っただけの貨幣量の存在が必要不可欠であり、ムロンには、必要な貨幣の確保は小麦の生産と人口増加に続く立法の第三の目的でさえあった。したがって、貨幣払底の時代にあって流通貨幣量の不足による経済の動脈硬化をいかにふせぎうるか、かぎりなく拡張を続ける産業活動に対応して必要かつ十分な流通貨幣量をどのように確保しうるか、彼が腐心するのはもっぱらこの点である⁽⁵⁾。ここから信用創造論および貨幣の増価・減価にかかわる議論が精力的に展開されていく。これらの議論によってムロンはのちにネオメルカンティリストとして位置付けられるにいたったこと、またムロンへのデューの反論、パリ・デュヴェルネによるデュー批判へと続く貨幣論争のきっかけとなったことはよく知られている。

他方で、ムロンは欲求に応ずべき産業活動の展開あるいは生産力の拡大は、就労人口の増加によって可能であると考えていた。「国家は国土、気質、利得に応じて、各職業で増えた労働者の数によってのみその勢力を増すにすぎない」(p. 96)。無為徒食の人々を労働者に変えるべきことなど、立法の第二の目的である(就労)人口の増加のためのあれこれの方策を彼は熱心に説いている。しかしみてきたように、就労者大衆の生産力のみが注目され、かれらの消費力は関心の埒外に置かれたため、彼の就労人口論は生産力理論としては不十分なものとどまった。たとえば、のちにフォルボネは生産力の安定的拡大のためには販路の確保と拡大が不可欠であるとして、これを消費性向の高い生産者大衆の消費力に求めた。就労人口の増加が生産力の拡大につながるのも、それが大衆的消費を増大させ、生産と消費を相互に拡大するからであった。生産者大衆の消費者としての側面

への着目は明確であり、それゆえフォルボネの就労人口論は素朴なレベルではあるが、生産力の理論として一応、成立しえている。こうしてみると、消費欲求とインダストリーという文明化を導く二つの動因への着目はムロンの卓越性を示すものであるが、しかしこの二つは十分には結合されていなかったといわざるをえないのである。

(注) (1) ムロンの *Essai politique sur le commerce* は 1734 年の出版であるが、ここではそれに続く 1736 年の増補版をテキストにしている。なお、以下の拙稿をも参照されたい。米田昇平「ムロン『商業に関する政治的試論』(1734 年)について」『下関市立大学論集』, 第 31 巻, 第 1・2 合併号 (1987 年 9 月)。

(2) ボワギルベールは次のように述べる。「なんであれある職業が解体すれば、どのようなものであれほかのあらゆる職業に直接あるいは間接にただちにその害悪を及ぼさずにはすまない。あらゆる職業は数々の輪によって構成される富裕の連鎖をなしており、一つでも輪がはずれてしまえば全体が無用となるか……あるいは少なくともきわめて不完全なものとなる」(I.N.E.D., *op. cit.*, p. 830)。ボワギルベールの名前をムロンはあげてはいないが、前者が用いた特徴的な *proportion* (釣り合い) の観念を後者も頻用するなど、多くの論点でムロンがボワギルベールに影響を受けた蓋然性はかなり高いと思われる。一方ムロンへのマンデヴィルの影響は明らかである。1717 年頃にムロンが外交使節の一員として渡英したときに、初めてこのポレミックな書物をめぐる喧騒にまみえたと推定されている。J. Bouzinac, *Jean François Melon, économiste*, 1920, pp. 25, 164, S. Meyssonier, *op. cit.*, pp. 73-83, Kaye, *The Fable of the Bees*, I, pp. cxxxvi-cxxxvii をみよ。

(3) マンデヴィルは「あらゆる社会の享楽は、大地の実りと国民の労働に基づく」から、政府は第一に製造業、技芸、手工業の促進、第二に農業や漁業の奨励に留意しなければならない、としている (I, p. 197/180)。農業が格別に重視されているわけではない。

(4) モリーズはムロンの奢侈論は細かい点ではほとんどがマンデヴィルの焼き直しであるとし (André Morize, *L'apologie du luxe au XVIII^e siècle et <Le Mondain> de Voltaire*, 1909, p. 129), ケイは「ムロンは『寓話』にはみられないいかなる基本的議論も呈示してはおらず、またそこにみられるいかなる本質的議論も除外していない」(Kaye, *op. cit.*, p. cxxxvi) とする

が、マンデヴィルの労働者観へのこのような批判は、たとえ不徹底ではあっても見過ごせないムロンの重要な特徴である。

(5) ムロンにとって、消費の不足のおもな理由は貨幣の必要量に対して流通量が不足していることにある。貨幣の退蔵もその原因の一つだが、しかし彼があげる退蔵の例は、おもに流通制度の非効率性のゆえに貨幣が「死んでしまう」例である。そこから彼は商業の自由（国内関税や通行税の撤廃）や徴税方法の改革などを唱えている。

3. 結び

『蜂の寓話』とムロンの『政治的試論』に影響されてヴォルテールは、1736年に『世俗の人』(*Le Mondain*)、翌年に『世俗の人の擁護あるいは奢侈の弁護』(*Défense du Mondain ou l'apologie du luxe*)を発表する。彼はそこで黄金時代の質素の美德は貧困ゆえにすぎないとして、その幻想をあばきつつ「わたしのいるこの場所こそが、地上の楽園」(*Le Mondain*, p. 139)⁽¹⁾と、みずからの奢侈的生活を高々とうたいあげた。彼には文明の果実の享受を謳歌するのに道徳的なためらいはいささかもみられない。「周りにかくも豊穡を目にし/アートや巧みな労作の母が/新たな必需品や享楽品を/その豊かな源からわれらにもたらすのを目にするのは/汚れたわたしの魂にはこのうえなく心地よい」(*Le Mondain*, p. 133)。『世俗の人の擁護』では、「奢侈は小国を損なうが/大国を豊かにすることを知るべき」(p. 155)とか「貧しい者は高貴な人々の虚栄心で生きる/そして労働は…緩慢な足取りで富への道を開く」(p. 156)など、奢侈の経済的機能に注目した表現がみられる。しかし、この時点でのヴォルテールの登場の意義は、要するに彼が利己的情念の全面開花すなわち文明の果実の享受を手放しで称揚し、伝統的な道徳世界の桎梏からの解放を宣言することで、よくも悪くも人々に時代の大きな転換を強く印象付けたことであろう。こうして新たな知的伝統の形成をめぐるせめぎあいの論争が、この世紀のフランス思想界を支配することになる。

経済と道徳、政治と道徳の不可分性を主張してやまない執拗な道徳的な奢侈批判をかわして、経済学の見地からマンデヴィルやムロンの議論を進めたのがヒュームやフォルボネであろう⁽²⁾。フォルボネはヒュームの影響を受けながら、奢侈は勤労の誘因であること、奢侈的欲求に基づく消費需要は生産者大衆の雇用の原因であり、したがって消費需要の水準が生産水準を規定すること、しかもこのような奢侈の享受は勤労次第でだれにも開かれていることを明言する。勤労と産業活動の活発な展開により「国民の奢侈は常により一般的なものとなっていく」のである。逆にそれらの展開に無縁な過度の奢侈は「循環の自然的秩序を覆えし、諸階層間の均衡を損なう」ものとして排斥されなければならない⁽³⁾。こうして、奢侈は事実上、だれもがそれを目指して勤労に励むところの相対的に高い消費水準を意味するにすぎなくなる⁽⁴⁾。ここでは、消費需要の水準を規定するのは消費性向の高い生産者大衆の消費力、すなわち大衆的消費である。奢侈の二つの経済的機能、労働のインセンティブの機能と消費需要の機能はここにおいて一般的レベルで結合されたといえる。この意味で、ボワギルベール、マンデヴィル、ムロンの欲求の相互的充足を結合力とする欲求の体系の構想は、ここで、いわば成就しうるのである⁽⁵⁾。

この構想は欲求の消費需要の機能への着目から導かれたものであり、したがって、そこでの分業と交換の相互依存のシステムはおもに消費連鎖の観点から把握されていた。このような奢侈的欲求の消費機能への着目により奢侈容認論は経済学の水準にまで高められる、というよりもむしろ、高い水準の消費欲求を満たすべく富の増大、生産力の拡大を課題として、ここから経済学は新たな知的伝統の中軸を担いつつ、その姿を整えていくのである⁽⁶⁾。

(注) (1) ヴォルテールのテキストは前掲の、Andre Morize, *L'apologie du luxe au XVIII^e siècle et 《Le Mondain》 de Voltaire* に所収のものを引用した。

(2) よく知られているように、ヒュームは道徳的に有害な奢侈と無害な奢侈

とを区別し、道徳的に有害な奢侈は社会的にも有害であり、無害な奢侈は技術と産業活動の洗練をもたらし、かえって人々を有徳にするから有益であるとして伝統的な奢侈批判をかわしこれに反論するとともに、この奢侈的欲求すなわち洗練への希求とインダストリーを両輪とする近代社会の展開を鮮やかに描き出した。道徳的に有害な奢侈をも社会的には有益であるとしたマンデヴィルを批判しつつ、ヒュームはムロンの立場を進めたといえる。フォルボネもこの点でヒュームを引用しつつ、「奢侈は人間を穏和にし、その礼儀を洗練し、気質を和らげ、想像力を磨き、知識を完全なものにする」(Forbonnais, *op. cit.*, t. II, p. 141) と述べている。

(3) *ibid.*, t. II, pp. 132-145.

(4) やがて勤労と産業活動の原因であり結果である高水準の消費欲求の充足それ自体はもはや奢侈とはみなされなくなり、反面で富者の過度の消費は、社会的富の非生産的な消尽あるいは富の生産の妨げであり、排除されるべき奢侈であるとして、経済学の見地からの奢侈批判が行われるようになる。

(5) ただしフォルボネは、一方で貨幣の積極的機能への着目および後進国の立場の考慮から、保護貿易による貿易バランスの順調を目指す。したがって、イギリスのような高賃金を到達すべき目標としながらも、「進歩の不均等性のゆえに」(*ibid.*, t. I, p. 147) フランスの当面の低賃金、低穀価をやむをえないとみる。こうして国外市場、「国外消費」への考慮が生産者大衆の消費力への彼の着目を屈折させる。ヒュームとの大きな違いであるが、この違いは一面で両者の置かれた立場の違い、したがって生産力の拡大をめぐるビジョンの違いを反映している。

(6) この観点からいえば、重農学派の経済学はむしろ異色である。かれらは富の生産を事実上、農業部門にしか認めなかったから、高水準の消費欲求の充足のための消費財の質的充実は関心の埒外に置かれざるをえない。農産物は基本的に必需品にすぎないからである。紙幅の関係で簡単にしか触れられなかったフォルボネを含めて、18世紀中葉以降の展開については改めて論じる予定である。